日本遺産

JAPAN HERITAGE

猪苗代湖（いなわしろこ）・安積疏水（あさかそすい）・安積開拓（あさかかいたく）を結ぶストーリー

未来を拓いた「一本の水路」

― 大久保利通“最期の夢”と開拓者の軌跡　郡山（こおりやま）・猪苗代 ―

猪苗代湖
別名「天鏡湖」とよばれる美しい湖。標高が514mの高い位置にあり、安積原野との自然落差を利用し、農業用水や生活用水の供給、水力発電の発展にも役割を果たした。

未来を拓いた「一本の水路」

― 大久保利通“最期の夢”と開拓者の軌跡　郡山・猪苗代 ―

明治維新後、武士の救済と、新産業による近代化を進めるため、安積地方の開拓に並々ならぬ想いを抱いていた大久保利通。夢半ばで倒れた彼の想いは、郡山から西の天空にある猪苗代湖より水を引く「安積開拓・安積疏水開さく事業」で実現した。

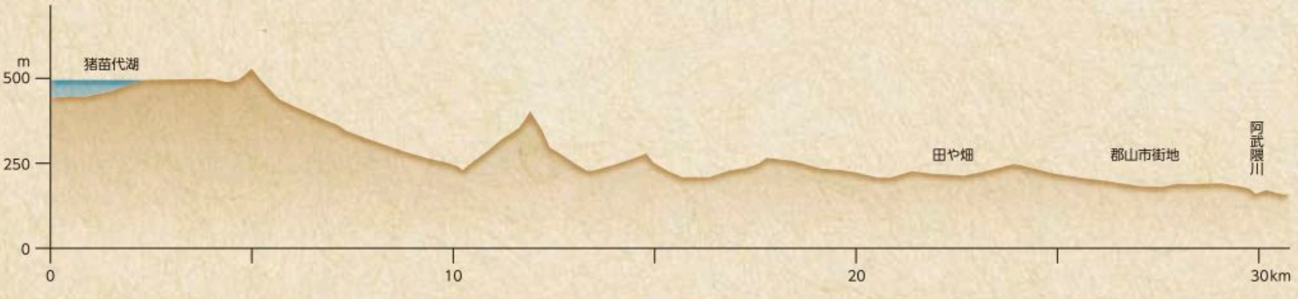
奥羽山脈を突き抜ける「一本の水路」は、外国の最新技術の導入、そして、この地域と全国から人、モノ、技を結集し、苦難を乗り越え完成した。この事業は、猪苗代湖の水を治め、米や鯉など食文化を一層豊かにし、さらには水力発電による紡績等の新たな産業の発展をもたらした。

未来を拓いた「一本の水路」は、多様性と調和し共生する風土と、開拓者の未来を想う心、その想いが込められた桜とともに、今なおこの地に受け継がれている。

明治15年安積疏水全図

※上記青線は当時の全図に水路を重ね合わせたものです。

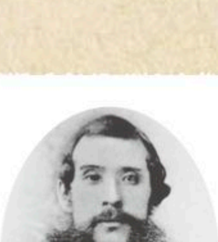
猪苗代湖から郡山付近の断面図



明治15年に完成した、安積疏水の全長は約130km。地形や高低差を活かし、北から南に水を流している。途中、7つの分水箇所を設けることで、広く水が行き渡るようにされた。

断面図は、猪苗代湖と安積原野の高低差を示しており、自然の落差を活かした疏水設計となっている。水を通すため、山を切り拓くトンネル工事も随所にあったことが見てとれる。

安積開拓・安積疏水開さく事業成功の主導者



大久保利通

乾いた大地を潤いのある実りの大地へと変えた「安積開拓・安積疏水開さく事業」。

「士族授産」と「殖産興業」を結び付けた開拓事業を安積原野で展開することで、この地の発展に国の未来を重ねて見ていた大久保利通。

彼の最期の夢となったこの事業は、それを受け継いだ者たちにより、壮大なスケールを持って成し遂げられた。

郡山の地に存在しているこの物語には、近代日本発展の縮図が描かれている。

日本遺産に認定された
「一本の水路のストーリー」

安積原野へは流れない、あこがれの湖

郡山(安積地方)から西の天空(標高514m)にあり、豊富な水を湛え、天を映し出す鏡のような美しい湖、猪苗代湖。郡山には、「猪苗代湖の水を安積原野へ」という疏水開さく構想が江戸時代から存在していた。枯渇した原野が広がり、人々は水を巡って争い、雨乞いや豊作の思いを込めた花火を打ち上げ、祈りを捧げていた。

しかし、猪苗代湖の水は西側へのみ流れ、奥羽山脈がそびえる東側の安積原野には流れなかった。加えて水利の問題があり、疏水開さくは夢物語であった。

開成館（かいせいかん）

安積開拓の中心的役割を担った「福島県開拓掛」の事務所が置かれた建物。当時の大工が西洋風の建物等を見よう見まねで造った「擬洋風建築」で、明治9年の明治天皇東北巡幸では、行在所(宿泊所)にもなった。

洋服を着た開成社員

明治9年、明治天皇に拝謁した際のモーニング姿の開成社員。当時、洋服等は珍しく、貴重なものであったことからも、進取の気質が感じられる。

大久保利通、安積の地に"夢"をみる

明治維新という近代化へのかつてない改革があった日本。明治4年(1871)、岩倉使節団は近代化を推進するため、欧米諸国を約1年10か月かけて視察した。そして欧米の発展を目の当たりにし、国力の差に圧倒させられる。彼らは、経済力と軍事力を備えるため「富国強兵」をスローガンとし、新産業の育成を目指す「殖産興業」の進展が急務と痛感した。この使節団に、安積原野の開拓を大きく左右する後の福島県令・安場保和（やすばやすかず）と、内務卿・大久保利通が参加していた。彼らは、開拓と産業振興が発展の源であると確信を得る。そして、安場はひと足先に帰国し、さっそく福島県の開拓に着手した。

明治6年(1873)、福島県の開拓に呼応した地元富商たちは、「開成社」を結成し、本格的な開拓に乗り出した。灌漑用の沼の整備や葡萄など海外果樹の植樹、西洋農具を用いた斬新で近代的な西洋農法を導入した開拓地は、収穫量や人口の増加により、新村が誕生するまでに至る。一方では、開拓事務所が置かれた「開成館」は西洋風の建物を地元の大工たちが錦絵等をもとに、見よう見まねで作ったその象徴的な建物であった。また、開成社員は洋服を身にまとい、積極的に西洋文化を取り入れつつ開拓を進めた。ここに、慣習にとらわれず、新たなものを受け入れ調和する進取の気質があったことが感じられる。

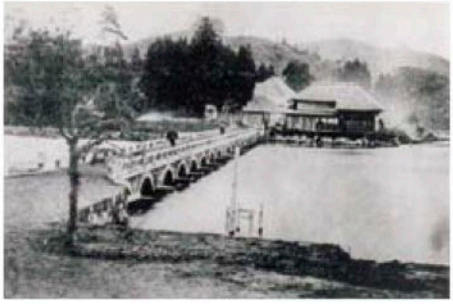
明治9年(1876)、明治天皇の東北巡幸の下見に来た内務卿・大久保は、福島県と開成社が進めてきたこの官民一体の開拓事業の成功に感激する。大久保は、「殖産興業」と改革で困窮した武士を救う「士族授産」を結び付けた全国的なモデル事業を、他の候補地に先駆け、広大な原野を有する安積の地で実地することを決断した。この地には、東西南北に通じる交通の要衝、豊富な水を湛える猪苗代湖、そして進取の気質を持った開拓者が存在していたからである。こうして大久保は、明治11年(1878)3月に事業案を提出し、政府は予算を計上した。しかし、事業開始目前、大久保は暗殺されてしまったのだ。彼は亡くなる直前まで当時の福島県令と会い、開拓にかける想いを熱く語っていたという。この大久保の"夢"は、開拓者やその想いを知る人々によって、明治政府初の国営農業水利事業「安積開拓・安積疏水開さく事業」として実現されていくのである。

十六橋水門
会津のみに流れていた猪苗代湖の水を安積原野へ流すために作られた、猪苗代湖の水位を調整する水門。安積開拓・安積疏水開さく事業のシンボル的構造物で、疏水工事で一番初めに工事が行われたのは、水路ではなく、この水門の建造であった。

新たなる挑戦、
そびえる山脈と時代を切り拓く

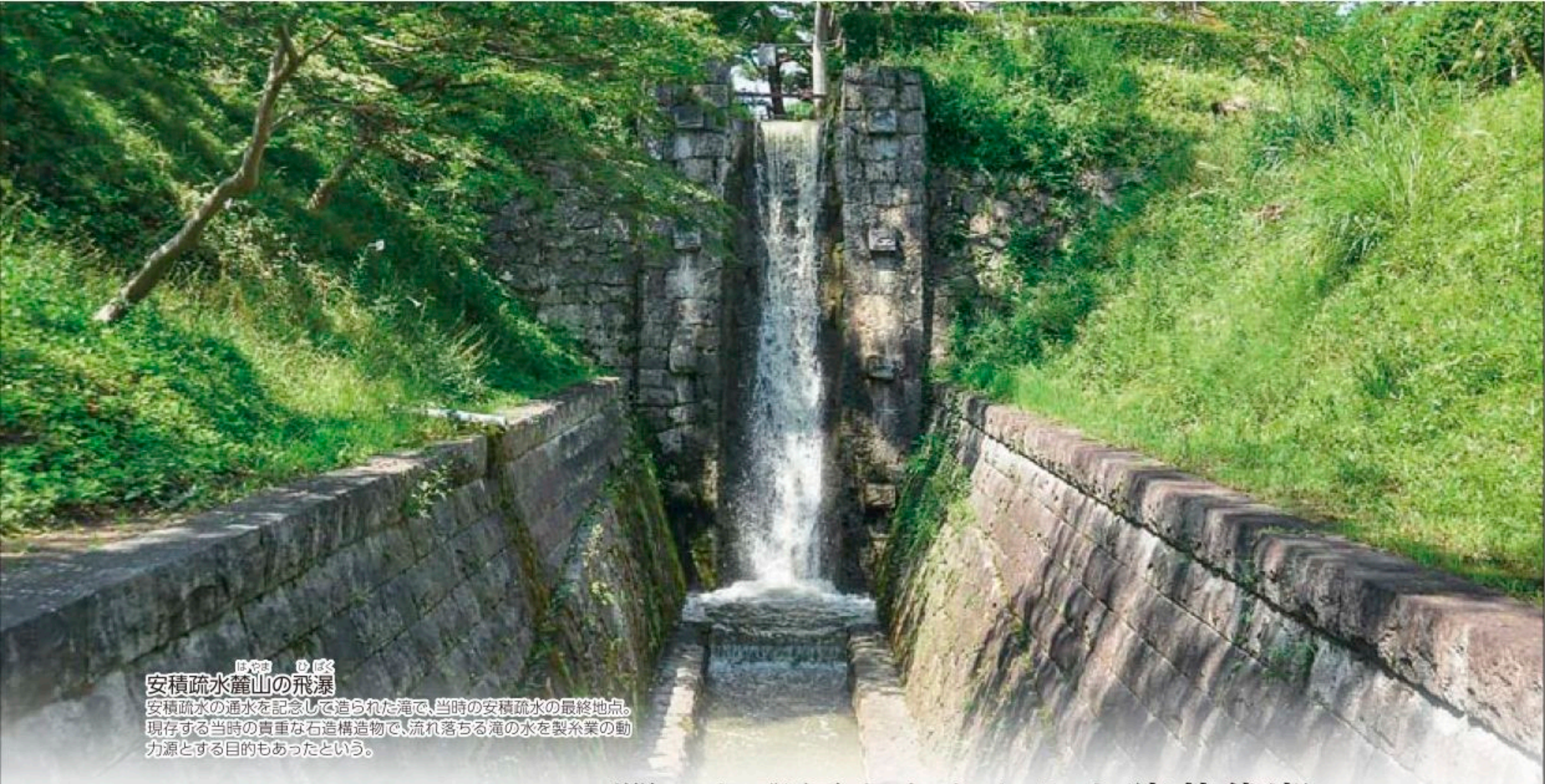
明治11年11月の九州・久留米藩を皮切りに、主に全国9藩から旧士族と、その家族約2,000人が刀を捨て、原野を開拓しようと入植してきた。入植者たちは、困難が予想される新たな土地での心の拠り所として、故郷の神社などからの分霊を受け、力を合わせ開拓に臨んだ。特に、人心融和のため伊勢神宮から当時唯一の御分霊を許された「開成山大神宮」は、人々の心の拠り所となっていたのであった。

明治12年(1879)、この大神宮で、かつてない大工事の安全と成功を祈願する起工式は行われた。始めに着手したのは、安積疏水成功のカギを握り、会津盆地と安積原野の水の流れを調整する「十六橋水門」の建設であった。革新的だったのは、オランダ人技師ファン・ドールンの監修のもと、近代土木技術が我が国で初めて疏水の設計に導入したことである。当時最先端の機器が用いられ、実測データに基づき科学的に検討するという従来の経験主義を脱却した草分け的な設計であった。この検証により、安積原野へ水を流しても、西側へ流れる水量は減らないことが実証され、水利という長年の大きな課題を解決に導いた。また、猪苗代湖の氾濫に苦しんでいた湖岸の住人達は、十六橋水門が治水の役割も持つことを知り、遠く離れた地からボランティアとしてこの工事に参加した。その人数は500人以上にのぼり、この大工事を1年程で完成させた。水路工事の最大の難関は、奥羽山脈に全長585mのトンネルを掘り、安積原野まで水を一気に流すことであった。硬い岩石を砕くダイナマイト、地下水を外に汲み出す蒸気ポンプ、補強のためのセメントなど、外国の最新技術が使われていった。また、鹿児島、大分、東京、横浜、岩手、新潟など全国から多くの技術者たちが集ってきた。開拓者たちの安積原野と猪苗代湖を繋ぐ挑戦は、疏水通水へと結実し、後の那須疏水と琵琶湖疏水の建設に大きな影響を与えたのである。



十六橋水門(当時)
当時は公道の橋を兼ねていた水門で、石組みで造られた眼鏡橋であった。1門ごとに8枚の板をはめ込む木製扉を人力で開閉していた。

開成山大神宮
安積開拓で入植した者たちの心の拠り所として設置された神社。伊勢神宮からの御分霊を祀っており、明治12年に安積疏水の起工式が行われた場所である。現在は「東北のお伊勢さま」として親しまれている。



安積疏水麓山(はやま)の飛瀑(ひばく)
安積疏水の通水を記念して造られた滝で、当時の安積疏水の最終地点。現存する当時の貴重な石造構造物で、流れ落ちる滝の水を製糸業の動力源とする目的もあったという。

潤いと発展をもたらした猪苗代湖、“夢”の礎となった風土

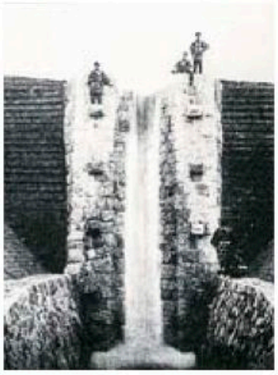
明治15年(1882)、約3年で、延べ85万人の労力と当時の国家予算の約1/3を要した水路52.1km、分水路78kmの安積疏水は完成した。その通水式には政府要人らをはじめ数万人が集い、事業の成功を祝った。

安積疏水は大地を潤し、約4,000haだった米の作付面積は、最大時に10,000ha以上へと広がった。収穫量は4,500tから10倍以上へと大幅に増え、実り多き大地へと生まれ変わっていった。また、清らかな水が一年中流れるようになり、鯉の養殖が盛んになった。それぞれ生産量が全国市町村で1位になるほど、食文化を豊かにしている。

明治後期からは、疏水の落差を発電にも活かすため、当時の最高技術を結集し、「沼上発電所」が建設された。そこから、23kmも遠く離れた郡山に11,000vの高圧電力を送るという、我が国初の長距離高圧送電を成功させ、日本中を驚かせた。この電力は製糸、紡績など郡山の産業を発展させていった。その後、十六橋水門を活用し、猪苗代湖の西側に建設された新たな発電所から関東への送電は、当時世界第三位の長距離送電と謳われ、近代日本を支えた。そして、開拓により人が集い、将来の叡智を育むための学校が作られ、やがて銀行の設立や鉄道の開通にも結び付いていった。

「安積開拓・安積疏水開さく事業」は、交通の要衝、全国と世界から人、モノ、技術、更には文化等の多様性を受け入れ、調和し、共に生きるという、この地の風土が大きく活かされ、成し遂げられた。それらは、農業・工業・商業の飛躍的な発展を通じて今も受け継がれており、日本の近代化を実現するため、この事業への熱い想いを語っていた、大久保利通の“最期の夢”を叶える礎になったのである。

旧福島県尋常中学校本館
桑野村が開拓事業によって急速に発展したこと、農民が土地を寄付したことや、無償労力奉仕の申し出が後押しし、この地に設置された。明治期の代表的な洋風建築で、国指定重要文化財。



安積疏水麓山の飛瀑(当時)
江戸時代の郡山宿の入り口にあった枡形(宿場の両端をクランク状に曲げた場所)の石積みを利用し造られた。

沼上発電所(ぬまがみはつでんしょ)
明治32年に、安積疏水の落差を利用して造られた水力発電所。当時の最高技術が集結されたことで、日本初の長距離高圧送電を実現した。この電力が製糸業や紡績業等、郡山の発展に大きく貢献した。

猪苗代第二発電所
大正7年に運転開始となった水力発電所。猪苗代第一発電所とともに、大正時代にこの地から発電した電力が東京方面へ送電され、当時の日本の中心を支えていた。赤レンガ造りの外壁は、東京駅を設計した辰野金吾(たつのきんご)が設計・監修を行った。

開拓者たちの想い、未来に花咲く

全国から集った入植者や技術者、政府、そして安積の地に生きた人々が、ともに切り拓いた安積開拓。かつて、福島県と開成社が開拓を進めていた折、灌漑用の沼の堤に、約3,900本の桜を植えた。現在でも、開拓の歴史を見守ってきたソメイヨシノの老木は、春になると開成山公園の土手一帯を覆い尽くす。

開成社の社則に、「私たちの代では小さな苗木でも、やがて大樹となり、美しい花は人々の心を和ませるであろう」との想いが込められた一文がある。この未来を想う心が、新しい時代を拓いたといっても過言ではなく、その想いは今なおこの地に息づいている。

開成山公園
開成社が灌漑用に造った池があった公園。約1,300本の桜が咲き乱れる県内でも有数の桜の名所であり、郡山のシンボル的な場所。

【構成文化財】

① 猪苗代湖	⑪ 金刀比羅神社(ことひらじんじゃ)	㉑ 槍 銘 国綱(やり めい くにつな)	㉛ 竹之内発電所
② 富岡の唐傘行灯花火(からかさあんどんはなび)	⑫ 宇倍神社(うべじんじゃ)	㉒ 十六橋水門	㉜ 丸守発電所
③ 安積開拓発祥の地	⑬ 安積開拓入植者住宅ー旧坪内家ー	㉓ トランシット	㉝ 旧福島県尋常中学校本館
④ 安積開拓官舎ー旧立岩一郎邸ー	⑭ 豊受神社(とようけじんじゃ)	㉔ レベル	㉞ 猪苗代第一発電所
⑤ 開成館	⑮ 八菅神社(やすがじんじゃ)	㉕ 算額(田村神社)	㉟ 猪苗代第二発電所
⑥ 金透記念館(きんとうきねんかん)	⑯ 三柱神社(みはしらじんじゃ)	㉖ 算額(稲荷神社)	㊱ 開成山の桜
⑦ 五十鈴湖(いすずこ)	⑰ 三嶋神社(みしまじんじゃ)	㉗ 安積疏水神社	㊲ 開成山公園
⑧ 大久保神社	⑱ 安積開拓入植者住宅ー旧小山家ー	㉘ 麓山公園	
⑨ 久留米水天宮	⑲ 開成山大神宮	㉙ 安積疏水麓山の飛瀑	
⑩ 水天宮	⑳ 太刀 勝光(たち かつみつ)	㉚ 沼上発電所	

日本遺産とは･･･

我が国の文化・伝統を語るストーリーを認定

「日本遺産(Japan Heritage)」は、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産(Japan Heritage)」として文化庁が認定するものです。

ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。

日本遺産認定

郡山市と猪苗代町では、近代郡山発展の礎となった“安積開拓・安積疏水開さく事業”をメインテーマとした、猪苗代湖・安積疏水・安積開拓を結ぶストーリー[未来を拓いた「一本の水路」― 大久保利通の“最期の夢”と開拓者の軌跡　郡山・猪苗代 ―]が日本遺産に認定されました。

■おすすめ周遊コース(約3時間コース)

- 開成山公園 13:00
- → 開成館 13:05～14:00
- → 開成山大神宮 14:05～14:30
  本殿参拝、旧二本松藩入植者の碑、中條政恒碑、「開成社」初代社長・阿部茂兵衛銅像、顕彰碑など
- → 開成山公園 14:35～15:25
  開拓者の群像、五十鈴湖、開成沼跡(野球場・陸上競技場)
- → 安積疏水土地改良区 15:30～15:55
- → 開成山公園 16:00

■安積開拓発祥の地･開成山と郡山歴史散歩(1日コース)

- 郡山駅 9:00
- → 郡山駅前の水天宮 9:05
- → なかまち夢通り 9:20
  (二本松藩代官所跡、江戸時代の宿場町)
- → 金透記念館 9:30
- → 如法寺 9:40
  (国重文・いなぼしの古鐘)
- → 麓山公園 10:00
  (麓山の飛瀑)
- → 郡山市公会堂 10:20～10:30
- → 開成山公園 10:45
- → 開成山大神宮 11:00
- → 開成せせらぎこみち
- → 途中昼食/休憩 12:30
- → 開成館 13:30
- → 安積歴史博物館 13:40～14:30
- → 安積国造神社 15:00～15:45
  (近代日本の礎「安積艮斎」記念館)
- → 郡山駅前 15:50
  薄皮まんじゅう作り体験、ふくしま民芸品の買物、郡山ビッグアイ展望フロアなど

■主要交通機関

日本遺産ウェブページ

日本遺産「一本の水路」プロモーション協議会(郡山市文化スポーツ部国際政策課内)
TEL024-924-3711

郡山市シティプロモーション
インスタグラム

本パンフレットは平成28年度文化芸術振興費補助金(日本遺産魅力発信推進事業)により作成したものです。　文化庁